

■牛場信彦 外交官。戦前に「樞軸派」として三国同盟を推進するも、戦後、毀誉褒貶恐れず、「親米派」の駐米大使になった。

うしばのぶひこ

伊藤博文暗殺 1909＝

兵庫県明石郡垂水町塩屋で、牛場徹郎、豊子の6男2女の三男に生まれる。父は穏やかな性格で、英語は上手ながら、実業の世界で力を発揮できなかったが、子供を自由に育てて、能力を発揮せしめて行く。母豊子は祇園の病院長の娘で偉大婦で才媛ぶりも知られていた。一家で上京し、

明治天皇没 1912＝ 3歳：

牛場家は藤堂高虎に仕えた伊勢の豪農を祖とし、幕末に牛場家に養子入りした祖父卓蔵は、上京して陸奥宗光の家に寄宿し、慶應義塾で福沢諭吉じきじきに学んで、門下でも剛毅かつ雄弁で知られ、ジャーナリストから山陽鉄道総支配人になり、当時の青年の憧れの的であった。

21ヶ条要求 1915＝ 6歳：

高輪の台町小学校に通う。金持ちの教養豊かな人達の多い自由な街麻布で育ち、記憶力がよく本好きなり弱な少年で、気管支を悪くして、一冬預けられた祖父の塩屋の楽しい思い出が強く、塩屋生まれであることを大事にして行く。

本格政党内閣 1918＝ 9歳：

祖父卓蔵が死去。慶應や麻布にも合格していたが、東京府立第一中学校に進学するも、期待はずれで、飛び級で卒業し、第一高等学校の文化乙類(ドイツ語)に進学、全寮制のもと、長兄友彦の意向で、潜艇部に入れられてしごかれ、名兄弟として知られるようになるとともに、強い身体になり、

原敬首相暗殺 1921＝12歳：

「整調」に抜擢され、翌年には、8年ぶりの全国制覇、翌々年には連覇を達成、

水平社結成 1922＝13歳：

ロサンゼルス・オリンピックを目指して、さらにボートに没頭するも敗北、あわてて猛勉強するも、有力企業の採用は終わっており、ボートで培われたフェアプレー精神を活かそうと、「公」の道を行こうと外交官試験を受ける一方、一つ上の幼馴染近衛文麿の私設秘書になった長兄友彦が、近衛の周りに人材を集めようと、白洲次郎はじめ名家と人脉形成、以後の活躍には、友彦の存在は計り知れないものになる。

門本時代始 1926＝17歳：

東京帝国大学法学部を卒業、満州事変後の対応に大わらわの外務省に入省し、アジア局第一課に配属、

金融恐慌 1927＝18歳：

山一証券創業者小池国三の娘元子と結婚(次兄道雄は元子の姉登志子と結婚していた)。

満州事変 1931＝22歳：

「ヒトラーの独裁体制が成立したばかりのドイツへ異動となり、途中、共産政権下のソ連の実状に関心。ドイツも国際連盟を脱退し再軍備宣言、ヒトラーと近かったにより”日独防共協定”が誕生させた駐在武官大島浩に接近、

五一五事件 1932＝23歳：

ハイドェルルクでドイツ語を学び、ヒトラー体制への転換を実感。ベルリンに戻り、妻元子も合流。

国際連盟脱退 1933＝24歳：

長女恭子が誕生。ヒトラーの「奇跡の経済復興」を肯定的に評価し、国民がまとって支える姿に感銘、

帝人疑獄事件 1934＝25歳：

次女紀子が誕生。ベルリン・オリンピックに強い印象。参加した東大潜艇部を迎え、多くの日本選手が活躍し、最もフェアで清潔と言う定評に満足。次期オリンピックの東京招致に、大島浩を裏から支えて実現、

芥川直木賞始 1935＝26歳：

以後、大島の信頼も得ただけでなく、ドイツ側にも目立つ存在になって行く。長兄友彦に誘われ、3年前に創設された近衛文麿の私的政策研究団体(昭和研究会)のメンバーになっており、「英米本位の平和主義を排す」近衛文麿に呼応して、ドイツとの連携を考えるようになり、「樞軸派」として関係推進を図って行く。

二二六事件 1936＝27歳：

ドイツ大使館勤務を終え、

日中戦争始 1937＝28歳：

帰国、ドイツ賞賛のキャンペーンするなか、ヒトラーが軍事全権を掌握。「革新派」の外交官としても知られており、日中戦争の収拾にあたった宇垣一成外務大臣の方針に反発し、連判状を叩きつけてもいる。

健保+総動員 1938＝29歳：

「独ソ不可侵条約」というどんでん返しで、「樞軸派」は冬の時代に。第二次世界大戦が始まり、

第二次大戦始 1939＝30歳：

追いだされる形で、在イギリス大使館に赴任。首相になったばかりのチャーチルをあざ笑うかのように、ドイツがイギリス空襲に踏み切るとたじろがないチャーチルを目の当たりにし、松岡外相が「日独伊三国同盟」を実現させる一方で、「日ソ中立条約」を結んだことに疑問を抱くなか、

大政翼賛会 1940＝31歳：

帰国を命じられるも、大島から呼ばれると、日本に残して来た妻元子が肺結核になったの知らせに心を鬼にして、二度目のベルリン駐在。ドイツ軍がソ連の赤軍に大敗した直後、日独間に何の連絡もなく行われた真珠湾攻撃に驚愕するも、「日独伊共同行動協定」締結で、ヒトラーが対米宣戦布告し安堵。

日米開戦 1941＝32歳：

ミッドウェーでの敗北後も、「樞軸派」のリーダーとして工作を続け、樞軸同盟の将来について悲観論を東京に打電するようになったスウェーデン公使館の神田襄太郎を、「国賊」と罵倒する事件を起こして、

創価学会検挙 1943＝34歳：

自らの存在が国益に反するものであるように言われるまでになり、「帰国命令、

年金+総武装 1944＝35歳：

結核を病む妻がいる小池家に着き、元気な子供たちに囲まれるが、空襲が激しくなり、真鶴に疎開。

敗戦 1945＝36歳：

*東京大空襲で実家も焼失。写真や日記類すべてが失われたが、最後の最後まで樞軸外交から離れず、仲間への心配りも忘れず、敗戦に至り、まさに負けっぷりの良さで、「樞軸派」の兄貴分に至る。当然のごとく、忌み嫌う者の方がはるかに多いなか、連合国最高司令官マッカーサーを迎える一員に派遣されたのち、

新憲法公布 1946＝37歳：

妻元子が死去。吉田茂内閣のYページにより、外務省を依願免官。極東裁判で、戦犯大島の弁護人になると、大島のドイツ時代の言動をつぶさに調査して、膨大な報告書を提出し、

極東裁判決 1948＝39歳：

子供3人もかかえ無一文の状況を脱しようともがくなか、大島は終身禁固刑に。GATTの発足に対応して、

三大事件 1949＝40歳：

三井物産常務の娘小林ふじ子と再婚。白洲の口添えで設置された外国為替管理委員会の事務局長に抜擢されると、必死に取り組み、自由貿易への流れを見逃さず、「ガットの守り神」と評されるまでになる。

朝鮮戦争始 1950＝41歳：

4人目の子礼子が誕生。木内信胤委員長と訪米。アメリカの豊かさや最先端技術を思い知る。

独立回復 1951＝42歳：

日本経済を復興すべく、3年前に商工省を衣替えた通商産業省に貿易庁を吸収して通商局を設けた白洲は、局長に外務省出身者を充てることにしたが、

マーチン事件 1952＝43歳：

通産省の3代目通商局長に抜擢され、岸信介を背後とする通産のはえぬき官僚との確執のなか、

テレビ放送始 1953＝44歳：

ヨーロッパを視察旅行、西ドイツの復興ぶりやイギリス人の気概に目を見張る。

自衛隊発足 1954＝45歳：

勤め上げて、古巣の外務省に戻り、訪ソして町の明るい雰囲気と感銘してのち、在ビルマ大使館参事官となって、賠償を具体化のための交渉、難航するも妥結に至るとともに、生のアジアを知ることに。

55年体制始 1955＝46歳：

官房審議官に昇格し、オーストラリアと通商交渉、自由貿易促進のための国際的なシステムに道をつけ、

なべ底不況 1957＝48歳：

経済外交の専門家として経済局長になると、日ソ通商条約交渉団代表代理を務めて調印にこぎつけ、戦後最大と言われた国際会議、東京でのガット総会の外国人接待責任者になる。

美智子妃 1959＝50歳：

翌年にかけて、22もの外国・地域を訪問、

安保闘争 1960＝51歳：

おそらく、将来駐アメリカ大使への起用を考えていた吉田茂の意向で、

タイタイ病始 1961＝52歳：

池田勇人首相に随行して、アメリカ、カナダを訪問するのに合わせるように、「駐カナダ大使になり、省内での批判も気にせず、一家で現地赴任し、大団アメリカに対し独自性を発揮しようとする姿勢に感銘、

TV宇宙中継始 1963＝54歳：

帰国し、外務審議官。東西冷戦のなか起きたトンキン湾事件をアメリカの謀略と見抜き(のち証明され)、韓国での朴正熙大統領による非常戒厳令に対処して、駐日アメリカ大使ライシャワーを喜ばし、

東京リボルヴ 1964＝55歳：

*日韓関係を画期をもたらした「日韓基本条約」仮調印にまでこぎつける。

大学紛争始 1965＝56歳：

国連の核拡散防止条約加盟には、「永久に二流国にされる」と反対姿勢、のち「非核三原則」について失言、

いざなぎ景気 1966＝57歳：

恩人吉田茂が死去。自ら望んで、外務事務次官を勝ち取ると、外務省の機構改革に乗り出し、

美濃部都知事 1967＝58歳：

初めて「わが国の外交政策大綱」を取りまとめ、アメリカとの間に残された小笠原諸島と沖縄の返還交渉、

全共闘 1969＝60歳：

初めに「わが国の外交政策大綱」を取りまとめ、アメリカとの間に残された小笠原諸島と沖縄の返還交渉、

大阪万博 1970＝61歳：

選官とともに、戦後7代目の駐米大使となり、

ドルショック 1971＝62歳：

沖縄返還交渉を決着させる一方、それ以上に問題になっていた日米繊維摩擦の交渉をまとめるべく、講演旅行などに駆け回り、田中角栄が通産大臣に就任して決着する一方、ニクソン大統領が翌年に中国を訪問するとのショックが続いて、ドル・ショックと続くなか、福田派寄りで見られていたため、

日中国交回復 1972＝63歳：

首相になった田中角栄は自ら日中の国交回復を実現し、

石油ショック 1973＝64歳：

駐米大使を免じられて帰国、外務省顧問になる。

角栄金脈辞任 1974＝65歳：

経団連会長植村甲午郎らの肝いりで牛場事務所が発足。

ケアンズ事件 1975＝66歳：

大島が死去。フランスで開かれる初めてのサミットの三木首相の個人代表に任命され、

JALハイジャック 1977＝68歳：

前年末に首相になった福田赳夫改造内閣の対外経済担当大臣に抜擢され、欧米との経済摩擦緩和に奔走、

中曽根内閣 1982＝73歳：

直腸癌が発見され、

悪化。勲一等旭日大綬章。戦後日本の経済外交を牽引した親米派外交官の結びとなるように、

日米諮問委員会(日米賢人会議)で日本側代表を務め、まもなく、没した。旭日桐花大綬章が追贈された。

浅海保「変節と愛国 外交官・牛場信彦の生涯」、